

鄭舜功著『日本一鑑』について (正)

—「桴海圖經」と「隴島新編」—

神戸輝夫*

【要 旨】 本稿は鄭舜功の畢生の著作である『日本一鑑』の内容について紹介し、論評を加えたものである。『日本一鑑』は明代の一連の日本に関する専門書の中でも白眉と称される著書である。その価値が高いのは、他の専門書の著者に比して鄭舜功のみが日本を訪れ、直接に日本豊後を見聞し、情報を収集した所にある。本稿では、『日本一鑑』を構成する「桴海圖經」「隴島新編」「窮河話海」の中からまず前二者を取り上げ、その多岐にわたる記述の中でも豊後に関するものに注意を払い紹介考察するものである。従って、本稿は16世紀半ばの豊後大友義鎮（繼）時代の海外交渉を明らかにする上でも新しい資料を提供する。

【キーワード】 鄭舜功 日本一鑑 倭寇 大友宗麟

はじめに

『日本一鑑』は、16世紀半ばに倭寇の禁圧を求めて九州豊後国府内（現・臼杵）に来航した明人鄭舜功の手になる著書である。この書は倭寇史研究にとって優れた資料的価値をもつとともに16世紀における日本事情に関して豊富な情報を提供している。同種の書に鄭若曾の『籌海圖編』があり、嘉靖年間に初刻出版されて以後数度の再版を経たこともあって広く知られ、倭寇史研究に欠かせないものとなっている。しかし『日本一鑑』は、その内容に関して『籌海圖編』を凌ぐものを含みながらも写本で伝えられたため、広く研究者の目に触れる機会が少なかった。最近『日本一鑑』の価値が認識されるようになり、日明交流史において研究者に利用されるようになった¹⁾。

その後『日本一鑑』を比較的詳細に紹介し、同書に高い評価を与えたのは武安隆・熊達雲著『中国人の日本研究史』である²⁾。即ち、この書の第二章「明代の日本研究」, 「2 代表的な明人の著作」において、「明代には日本に関する著作がたくさん書かれたと紹介したが、著者のなかで、日本へ行ったことのある人は、恐らく『日本一鑑』の著者鄭舜功のみであろう」「実地考査して書かれた著作」³⁾として『日本一鑑』の内容紹介を行い、「『日本一鑑』はやはり集大成の作品で、明代中国における日本研究の白眉である」⁴⁾と高く評価している。ただ武安隆氏等による同書の紹介は、明代における日本研究の他書との比較においてなされているので、

平成11年9月30日受理

*かんべ・てるお 大分大学教育福祉科学部歴史学教室

同書全体の内容を詳細に紹介する点に主眼がおかれていない。従って、本稿においては、上記武安隆・熊達雲氏の『日本一鑑』に対する評価をも適宜紹介しながら、同書の内容について、特に豊後に関係ある部分に注意を払いながら、その全体像の紹介と論評を行いたい。

なお筆者が用いた『日本一鑑』は、京都大学人文科学研究所所収「民国貳拾八年據舊鈔本影印」本である。

I. 著者鄭舜功

『日本一鑑』の著者鄭舜功については、拙稿「鄭舜功と蔣洲」において既に紹介しているので、ここでは簡潔に記しておきたい。

『日本一鑑』は「桴海圖經」三卷、「隴島新編」四卷、「窮河話海」九卷の三部からなるが、そのいずれにも「奉使宣諭日本國新安郡人鄭舜功」と記し、鄭舜功の出身地は「新安郡」とする。新安郡は明代には安徽省徽州府を指し、その中心は歙県にあった。また 鄭舜功は自らを称して「布衣鄭舜功」「功は賤にして學は疎く、科甲に登らず。」（『窮河話海』卷之九後段）、「功は固より草茅なるも、本よりは是れ男兒たり。官守言責なきと雖も、況んや已に天使を奉じ、正氣なお存し、赤心なお存す。」（『窮河話海』卷之九後段）と言っているのだから、科挙には合格していない無官の一平民（絛）^{（絛）}、一草茅であった。

鄭舜功が日本に赴き、倭寇禁圧を訴える考えを最初に上奏したのは嘉靖二年癸未（1523）年であった。しかし、これはすぐには取り上げられなかった。その後嘉靖年間の倭寇の猖獗にともない、明朝は倭寇対策に迫られ、倭寇禁圧を諭す使者を直接日本に派遣する政策を取るようになる。嘉靖三四年乙卯（1555）年、鄭舜功は再び倭寇禁圧の使者となることを願いでて皇帝の裁可を得、浙江総督楊宜によって「大明國客」の名をもって日本に派遣された。

鄭舜功の日本豊後への到着は嘉靖三五年仲夏（1556年5月）であり、以来六カ月に亘って豊後臼杵・府内に滞在し大友義鎮（綱）から倭寇禁圧の約束を取り付けている。一方、部下の従事官沈孟綱、胡福寧を京都に派遣し、後奈良天皇とその重臣にも接触させた。鄭舜功は豊後滞在の間、積極的に日本に関する資料と情報を収集し、また沈孟綱らに対しても各種の絵地図などを収集させた。それらは『日本一鑑』を著述するための貴重な資料となった。

鄭舜功の帰国は嘉靖三五年末に豊後府内出帆、翌三六年（1557）一月に広東帰着であった。鄭舜功はその帰国に際して大友義鎮から明国へ派遣された二人の僧を伴っていた。即ち正使の府内同慈寺華岳院主・佐伯龍護寺住僧清授と副使の野津院到明寺僧清超である。

帰国後の鄭舜功らの運命は苛酷なものであった。鄭舜功を派遣した総督楊宜は既に失脚しており、時の浙江総督胡宗憲は鄭舜功の功績を認めず、逆に彼を迫害して投獄した。鄭舜功の投獄期間は七年に及びその間に清授・清超らは四川に流謫され、遅れて帰国した沈孟綱・胡福寧らは広東海上で殺害された。

鄭舜功は獄から解放された後の余生を『日本一鑑』の完成のために捧げた。鄭舜功の没年は明確ではないが、嘉靖三六年（1557）の帰国とその後の状況を勘案すると、『日本一鑑』の完成の時期は隆慶年間（1567年～1572年）から万暦年間の初めの頃（万暦元年は1573年）にあると思われる。言わば『日本一鑑』は、鄭舜功の畢生の大作である。

II. 『日本一鑑』著作の動機

上に述べた鄭舜功の略歴からすると、『日本一鑑』執筆の動機はあらかた推察できるが、ここでは「窮河話海」「隴島新編」「桴海圖經」の記述から、それに関係する記述を拾い出して考察してみよう。

まず「窮河話海」巻一の冒頭に次のように記す。

「（鄭）功は舊章を思い、天聰を冒干し、聖明を荷蒙し、海外に遣使し、文徳を奉宣し、裔夷を化道するに、其の要領を得、治安を致さんことを期す。歸りて娼嫉に罹り、卒に事を償るを致す。憤思するに張騫の出自は草茅、使命を奉ずるに非ざれば、老を終えるまで聞こえる無からん。（鄭）功も亦草茅、時に聖明に際し、使を化外に奉じ、功まさに垂成せんとし、娼嫉に罹らざれば、然らば東南蕩平せん。功は豈張騫に下らんや。蠢爾の海寇、十有餘年、汎動き風生まる。徒に焦爛を報ゆ。なんぞ長治久安の道をなさんや。孤憤は已まず。遂に見聞を以て編を類し集を成す。目して窮河海話と曰う。凡そ古今馭夷の事に及んでは、知れば則ち悉く載せ、上は天覽に陳し、下は時政を匡わん。」

即ちここには、庚戌の年（1550）より東南沿海が倭寇の被害を受けるようになったことから、鄭舜功が倭寇を禁圧せんと一念発起し、自ら使者となって日本に赴き成功裏に任務を果たして帰国したが、その成功を妬まれて投獄されたこと、自らの成し遂げた功績は、一草茅の身で西域に使いした張騫の功績にも劣らないが、このまま没すれば張騫のように名を残すことができないこと⁵⁾、十数年来の倭寇の猖獗を目にして、自らの見聞を著述して倭寇を平定し治安を回復するために役立てんとする願末が記されている。

また「窮河話海」の最終巻九の結びに、「伏して望むらくは皇上犬馬の微勞を哀れみ、干戈未だ已まざるとき、特に詞臣に勅し、其の繁文を刪り、少しく時政に資し、乱を捩り治に反るの用を爲せよ。草茅幸甚のみならず、東南幸甚、天下幸甚ならん。」と述べているので、『日本一鑑』執筆の動機は、第一に自らの日本見聞を以て倭寇対策に役立たせることにあったと言えよう。

次に「隴島新編」巻一の冒頭では、やはり鄭舜功が「鯨波を歴履し、忠信の言を行い、文徳の教を彰らかにす。東夷は聽信し、禁令は行わる。」と、日本に使用して倭寇の禁圧を願うことが成功したこと、また「彼に館すること六カ月、其の風俗を諮り、其の地位を詢い、其の説を聞くを得、其の書を見るを得たり。書言を覆按するに、皆一に合す。其れ我を誑かさず。豈忠信の驗、文徳の微あらざる者ならんや。故に従事に命じて、其の圖冊・繪録の備えをもってせしむ。書を按じ編し、遂に類聚を爲し、役を祇んずの談に寄す。」と述べ、日本（豊）六カ月滞在中に様々な形で情報を収集し、それらを纏めて一書となし倭寇対策に役立てんとしたことについて記している。続けて次のように記す。

「王師計數の秋に歸るに、輒ち文を以て獄に下すを告げられ、故に忠信に違ふ。未だ治安に即かず。是の書棄て置かれること既に久し。曩に縲綬に在りしに、適たま客の問いて曰く。『四方に使いし、琉球の如きは紀錄あり。松漠の如きは紀聞あり。日本に天使し、夫れ豈録無きか、聞無きか』と。告語見聞は曾って集を成すことあり。又聞くに島夷は圖編を賦う。之れを覆按するに、其の通國・地方の名號は、夫れ字類聞見の遺して見聞の逮ばざること無きに因り、敢えて濫に編次し、書として一卷と成し、萬里歎然、隴島新編と題す。・・・救世の士君

に貽り、我に後るるの使者に^{あか}えて、未だ必ず資せざるにあらず。」

即ち、鄭舜功苦心の作「隴島新編」は、彼の入獄中に棄て置かれた状態にあった。しかし、鄭舜功は獄中であつたとき、たまたま「客」から、琉球や松漠に旅した者には「紀録」「紀聞」があるのに、日本に公式派遣された鄭舜功には、そうした類いのものがどうして無いのかと問われ、また鄭若曹の『籌海圖編』が遺漏の多いことを知り、放棄されていた同書を「新編」することを決意するに至つたのである。また鄭舜功は、「隴島新編」著作の動機は、後世の「救世士君」「使者」のために残し役立たせるためと言っている。

最後に「桴海圖經」はどうであろうか。巻一にまず次のように言う。

「今におよんで二十有餘年、中國の私商、絡繹して彼に市す。各路經あり。但その域に^{いひ}抵り諸貨財を市すのみ。誰か彼の都域の詳を究めるや。間々彼の地名を知るも、何ぞ亦皆倭音なるか。且つ野顧・抱里の類い^い是れなり。況んや彼の倭字に審かならず。又何に従りて華文を正すや。山川の險易、道里の遠近に至りては、尤も得て知る可からず。夫れ既に知らざれば、彼の國に往くを欲すと雖も、何を以て從入の道と為すか。抑も庚戌以来、姦宄禍亂、今におよんで寧^{やす}からず。彼の逆に從う者は、華夷の往來遠近の道に多く之を稔知す。我は事の公に當り、尚知らざるの者あり。何に従りて彼の域の詳を得んや。」

即ち、当時明国と日本との交易路は、私貿易に従事している者によって熟知されていたが、日本国内の事情、例えば山川の險易、道里の遠近、都城の様子など日本に関する知識が不詳であつた。鄭舜功は、その任務を遂行する上においても正確且つ詳細な日本情報を得ることが必要であつたのである。前文に続けて鄭舜功は、更に次のように言う。

「丙辰仲夏、人事既に^{そな}はる。風汎乃ち期す。我方に津發し、廣より倭に至る。山水物色、見て詢わざるは無く、詢いて志せざるは無し。山海文字の精詳を得ざると雖も、亦必ず其の聲音向方の彷彿を記す。既に其の境に入らば、但國客の名を以てし、忠信を布し以て文徳を宣し、仁義を陳べ以て姦偷を定む。日本豊後の君臣をして豁然開悟し、後先に化に歸さしむるを致す。然るに是の時に當たりて、事を彼に勤めて數句を経たり。凡そ諸履涉及び諏諮する者を得たり。島嶼都城の統屬、水陸途次の程期、住泊經由の處、各其の指歸を究めざるはなし。又特に其の地名倭音の彷彿を記し、且つ諸翻譯を考え、我が文字の精詳に寄す。」

即ち、鄭舜功は日本への航海中から日本に関する情報を書き留め、豊後君主大友義鎮の説得と言う本来の任務を達成した後も、広く日本に関する知識を収集し、これまでの不足や不正確、不詳な点を書き改め、また日本語の発音を採録して、それを中国語音によって表記すること(翻)を行った。ここには日本に関する情報を体系的に整理して提示するという鄭舜功の野心的な著述目的が表されている。

以上、「窮河話海」「隴島新編」「桴海圖經」の記述から、鄭舜功の『日本一鑑』著述の動機を検討してみた。その動機は基本的にはこれで尽きていると思われる。しかし、私には、その他に、鄭舜功の心中には、日本に関する専門書として刊行され評判の高かつた『籌海圖編』を凌駕する著述ができるとの自負心があり、そのことが彼をして『日本一鑑』の著述に駆り立てたように思われる。

「窮河海話」巻八(議)に、鄭舜功は鄭若曾とその編纂書『籌海圖編』について次のように述べている。

「比^きごろ監生鄭若曾、聞いて之を顧み、要領を聞くを願う有り。功因^よつて書を出し以て示す。若曾曰く。『昔(昧)圖纂・(讎)圖編をつくりし時、但倭夷の事は風聞のみにして未だ眞な

らず。今是の書を見るに、見る事早く世にあらざるを惜しむ。昔の纂編の類、改證をなさんことを願う」と。功固く之を辭す。若曾また曰く。『事は國家に在り。我に辭することなきを願う』と。嗟、夫れ若曾なお未だ肉を食らわず。初め功の書を見て、早からざるを惜しむ。夫れ寧波に志す者は、志は家國に在る也。又豈功の書を早見するを欲せざるや。」

鄭若曾は、『日本圖纂』と『萬里海防圖記』を著していた。その後胡宗憲の協賛を得て、前兩書を改訂増補して『籌海圖編』としたのである⁶⁾。鄭若曾は「肉も食らわない」努力の人であった。彼は、鄭舜功の『日本一鑑』を見て、『籌海圖編』の及ばない点があることを知り、自著を改訂する気持ちに駆られ鄭舜功の書の借用を申し出たのであるが、鄭舜功はその願いを断つたのである。「寧波に志す者」とは、寧波が日本に向かって明朝が公式に開いていた朝貢用の港であることからして、日本に関係する仕事、例えば日本に関係する専門書の刊行などを行い、国家のために奉仕するという意味であろう。鄭舜功は、「寧波に志す者」である鄭若曾ほどの人物が『日本一鑑』を読みたがるのは当然だと、自らの著作の優れていることを誇っているのである。

また鄭舜功が鄭若曾の『日本圖纂』『籌海圖編』の名を挙げて、その記述の誤りについて批判した箇所が二つある。一つは「窮河海話」巻七（齡）の日本における勘合の所在について触れた部分で、次のように指摘する。

『浙江通志』『寧波府志』は謬りて兩給の勘合を以て、一は肥後に貯えられ、一は周防に貯えらるとす。『日本圖纂』『籌海圖編』は勘合を以て、皆山口に在りて、陶殿の亂にて俱に焚せりとす。夫れ此の言は、蓋し昔事に任るの臣、始終を壞謀し、甘んじて自ら欺き、殊に我が皇祖宗の給與せる勘合、悉く日本國王の宮房に貯えられ、今に至るも失う無きを知らざるによる。嘉靖己亥・戊申（1539・1548）歳、山城國都の天龍寺僧周良（一號）は先後正副使に奉充せられ入朝す。勘合果たして山口に在らば、山口豈自ら専らにせざるや。なんぞ山城の僧を以て奉使するや。功、其の詳言を得るは辨を好むには非ず。但源を澄ませ本を端すを欲すのみ。豈世を惑わし民を誣すを容さんや。」

鄭舜功は、嘉靖己亥・戊申の年に入朝した天龍寺僧策彦周良の例を挙げて、勘合は山城國都（諱）にあると主張する。一方『浙江通志』『寧波府志』においては肥後・周防とし、鄭若曾の著作においては山口とするのは、「事に任るの臣」の情報に拠ったために生じた誤りとする。「事に任るの臣」とは誰か。私は、鄭舜功と同時期に浙江總督胡宗憲によって日本に派遣され豊後に至った蔣洲を指していると考ええる。

即ち、鄭舜功は蔣洲の情報収集は正確さを欠くとしているのである。このことは、「日本へ行ったことのある蔣洲・陳可願を訪問し、日本の山川地誌・風俗民情を取材し」⁷⁾「胡宗憲に幕僚として招聘され・・・胡宗憲の絶大な支持の下に『籌海圖編』を編纂刻印し」⁸⁾た鄭若曾や恐らく同様の手段を採ったと思われる地方志の執筆者を厳しく批判していることになる。

二つは「窮河海話」巻七（諱）の項である。

『日本圖纂』『籌海圖編』は、日本國印久しく山口の得る所にして、一角を損うに及ぶとす。今は印の在る所の説を知らざるなり。夫れ此の語は、蓋し昔使人の詐謀を用って、以て王直を圖らんとするするにあり。・・・何ぞ金印山城に在らず、之を山口に在りと謂うは、蓋し昔の任人既に綏遠の才に非ずして、終に深臨の役を負うによる。是れより邊釁を開き、輒ち欺罔の觀聽を復げ、一たび板行に至りて惑を時政に取る也。」

即ち、鄭舜功は、中国から日本に給賜された日本国王の金印は三種、前漢光武中元丙辰（56

年)の金印, 魏景初戊午(238年)の金印, 明永樂癸未(1413年)の金印であり, これらは全て「日本國王の宮房に蔵す」とした上で, 鄭若曾の著作の記述は誤りとする。この誤りが生じたのも「綏遠の才に非らざる」蔣洲の偽りの情報を元にしたからであり, 且つそれを刊行し世を惑わす罪は大きいと批判を行っている。

以上のことからして, 鄭舜功には, 蔣洲の情報を取り入れて完成した鄭若曾『籌海圖編』の批判を行うことにより, 自らの著作『日本一鑑』は『籌海圖編』に勝る価値を持つものだと自負する点があったことは勿論であるが, その他にも蔣洲に対する強いライバル意識の現れがあり, 延いては鄭若曾・蔣洲の背後に在って鄭舜功を投獄し, 二人の豊後僧を四川に流謫した浙江総督胡宗憲に対する怒りがあったと言えよう。

Ⅲ.「桴海圖經」(三卷)

「桴海圖經」は三卷より成り, 全体として中国広東から日本国都に至る路程を文と図によって示したものである。

「卷之一」は「奉使宣諭日本國新安郡人鄭舜功撰述」として記述する。その書き出しは「歳乙卯(1555)年, 功まさに使を日本に奉ぜんとし, 道を嶺南より取る。」であり, 鄭舜功が広東にあって日本への渡海準備を行った状況を記す。

その一つは日本への海路に明るい人物の招請であり, 他は航路図の収集であった。最初に得た航路図『鍼譜』は, 余り詳細なものでなかったと批評する。次いで鄭舜功は『渡海方程』と『海道經書』を得たが, 「此の兩書は同出にして異名なり。」と言い, 「是の書, 多く西南夷國の方程を載すも, 日本の程途は, 其の名有り」と雖も亦鮮し。」と, その考察の結果を述べている。次に「詳有る者は『四海指南』と曰う。」と『四海指南』を見ているが, これも魏晉隋唐時代の朝鮮沿海を通行する航路図であり, 広東からの航海には役に立たないものと結論した。

鄭舜功は広東からの渡海に役立つ航路図を欲し, 明代にこの航路に関係した先達の足跡を自ら研究している。その一つが「國初の僧宋渤」が「使者」に贈った「蒼茫熊野山, 一發青雲際」詩である。鄭舜功は「熊野は彼の南海紀伊の間に在り。秦の逋がる方士徐福の祠堂これに在り。」とし, 「夫れ詩言に據るに, 道は其の右に非らざるはなし。」と結論している。次いで「學士宋濂の跋」の「翁州揚帆五日至其國, 又踰月入其都。」を取り上げ, 「言此の如きも亦未だ其の詳を見ざる也。」としている。次に, 嘉靖初め給士陳侃が福建から琉球に出仕した際に, これに随行した者の中に「日本の路程を識る者有り。故に, 閩海の人, 因って道を小大琉球より取り, 諸海山に沿って一路にして去く。」と述べ, 福建人は琉球から日本への航路を知っていると判断している。また「廣海の人郭朝卿は稻を販せんと航海し, 漳・泉に市し, 風に因って漂流し, 其の國に至る。故に廣海の人, 自後亦其の道を知る。」としている。

鄭舜功は以上のような研究と自らの日本への往復経験を踏まえて, 「圖一本を摹し, 前に長歌一閱を賦し, 又次いで其の方輿を述べん。目して桴海圖經と曰う。」と, 広東から日本への航路図とその説明文を作成した。

ところで鄭舜功は, 「桴海圖經」に取り上げる地名等を説明するに当たって, 「倭音の彷彿は, 且つ諸翻譯を考え, 我が文字の精詳に寄す。」(曄-), 「是において漢字を大書し, 倭音を小寄す。」(曄三)とあるように, 日本語による発音を漢字を用いて併記している。このやり方を鄭舜功は「寄語」と呼んでおり, 「窮河話海」において数多く表記した単語の全てにも行ってい

る。「寄語」は鄭舜功の発明ではなく、『日本一鑑』に先行する日本研究の専門書においても行われている方法であるが、「日本の学者三ヶ尻浩氏は校本『日本一鑑』の解題で、この本を『戦国時代国語の宝庫である』と称えているが、同書はこの評価にすこしも恥じるところはないと言えるであろう。」⁹⁾とするように、『日本一鑑』が「寄語」した単語は他書と比べてずば抜けて多いのである。

さて、「卷之一」は、以上に続けて「萬里長歌」と題し、広東の海上から日本に向う航路について紹介する。その内容は「卷之二」の航路地図、「卷之三」の航路紹介においてより詳細に述べられているので、後に取り上げることにし、ここでは豊後に関して記述された貴重な内容を掲げておく。

その一つは、「廣より道をとるに飄飄として澳濱に入る。馬に策して豊後の君に見える。」と記す部分である。また鄭舜功はこの一文に次のように割注する。

「然るに是の時に當たり、吳越の闊海、皆事殷なり。而して我れ道を廣より取り、往きて日本王に諭す。彼の域中に行きて颶風すなわち作り、澳濱に飄入す。澳濱はすなわち彼の豊後の地にして釜江の西にあり。豊後は日本分封の國なり。其の姓名の若きは源義鎮にして日本國王の宗族なり。其れ豊後・筑後・肥後・肥前・筑前等の國を轄す。又日向國も犬牙これに屬す。彼れ六國と謂う。津港はなお姦宄多し。且つ東に偷み西に偷む。來る者は彼の國君知らざる也。」¹⁰⁾

この記述を考えると、鄭舜功の船は、倭寇の活動の激しかった浙江海域を避け、広東海上から出港し、日本の域中に入り大風に遭遇し、豊後府内の港であった「澳濱」に漂流するような形で入港した。鄭舜功は「澳濱」から馬に鞭打って豊後の君である大友義鎮に会いに行ったとしている。「澳濱」は「烏氣法邁」（欽三）即ち「オキハマ」と寄語され、「沖の浜」に比定される。鄭舜功が澳濱＝沖の浜から馬に乗ったとすれば、その港の態様は砂州のようなもので陸地と繋がったのではないかと考えられ、所謂「沖の浜」＝「瓜生島」論争に一石を投ずる重要な史料となる。¹¹⁾

次に「卷之二」は「滄海津鏡」と題し、「奉使宣諭日本國新安郡人鄭舜功參繪」として広東から日本山城までの海図が描かれている。この図は「卷之三」の航路説明と符合するもので、鄭舜功が実際に経験した航海が反映されている。武安隆等の前掲書ではこの地図は紹介されていないが、中国人によって描かれた地図として極めて貴重なものである。九州に関する部分の地図を次に「図1九州南部地域」として示す。これらの地図は、卷三に「天使紀程」として記述される「夷海右道」「夷海上道」「夷島陸道」の中の九州に相当する。

「卷之三」は「天使紀程」と題し、「奉使宣諭日本國新安郡人鄭舜功編紀」として上述した海図に符合する形で九州から京都（山城）までに至る航路、陸路の説明をしている。これを記述するに当たっては、前述した「寄語」の方法を用い「夫の水を渉り山を登り、舟を停め馬を駐めるが若きは、悉く詳紀を為す。」と、出来るだけ詳細に記述する方針を示している。

まず最初に紹介されるのは「夷海右道」である。

この海道は、「人烟六七十戸」の硫黄島（易付島佳世邁）から西風に乗って250里で屋久島（耀固世邁）、更に200里で種島（太業儒世邁・現種子島）に至り、ここから南風に乗って350里で山川（耀邁佳）、或いは360里で棒津（荷利・現坊津）に至るとする。

鄭舜功の乗った船は豊後府内に入るのので、山川から以下は薩摩半島南端、大隅半島、日向灘、豊後水道沿海の諸港が随時紹介される。即ち、現在の地名で言えば指宿、加治木、志布志、油

津、内海、美々津、細島、佐伯などの地名が見える¹²⁾。また内海から内陸に入ると阿蘇、朽網、田北、豊後、「澳浜」、田原、玖珠などの豊後地方に関わる地名を挙げている。

豊後水道から四国東部沿海の諸港については拙稿「十六世紀豊後水道交通の一端」において考証したのでここでは豊後に関する原載地名とその「寄語」のみを挙げておく。即ち、竹島（太杰儒世邁）、豊後（付課）、彦岳山（沸課太杰雅邁）、坂關（腮佳射氣）、高島（太佳世邁）、白杵（烏自氣）、釜江（佳邁耶）、四浦（右儒烏刺）、古河（府六佳歪）、澳濱（烏氣法邁）である。

豊後から京都に向かう海道として、鄭舜功は更に四国土佐地方西部から太平洋岸の地名を順次挙げる。そこには土佐清水、足摺岬、須崎、浦戸、室戸岬などの地名が見える。（「図2 豊後を中心とする地域」参照）

次に紀伊水道から大阪湾に入る。そこには椿、沼島、淡路、和泉、堺などの地名が見える。次いで淀川を溯り、桂川から山城に達す。そこには守口、八幡、淀、鳥羽などの地名が見える。

以上「夷海右道」に列举された地名のほとんどが現行の地名に比

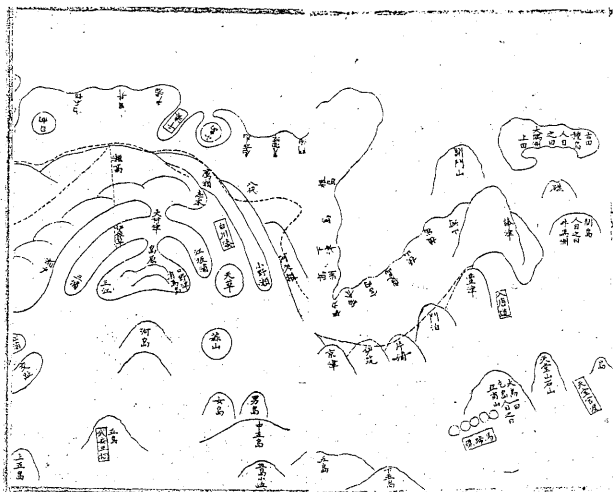


図1 九州南部地域

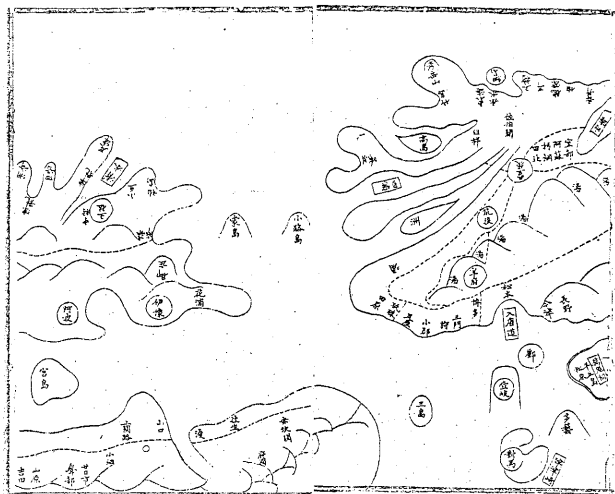


図2 豊後を中心とする地域

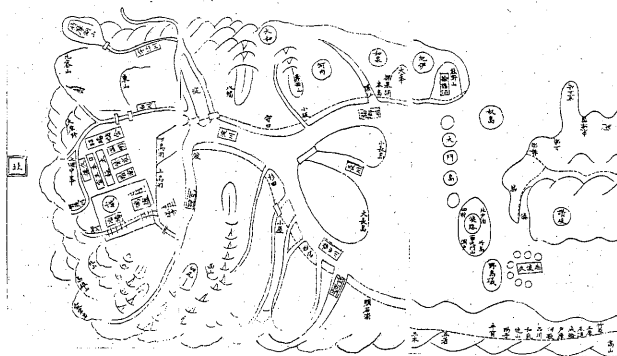


図3 瀬戸内東部から京都に至る地域

定することができる。（「図3 瀬戸内東部から京都に至る地域」参照）

このことからしても鄭舜功の情報は非常に正確性が高いと評価してよいであろう。

第二に紹介されるのが「夷海上道」である。

この海道は硫黄島、棒津までは「夷海右道」と同じで、棒津から九州の西海岸を北上して行くものである。鄭舜功は硫黄島から「西南風四百餘里、渡りて乞島に至る。南風五百餘里、五島に至る。五島より二百五十里、渡りて平戸に至る。平戸より三百五十里、渡りて博多に至る。博多より渡りて赤坎関に至る。」という航路もここで示している¹⁷⁾。

さて棒津から西薩摩を北上する海路では阿久根などの地名が見え、肥後に入る。ここでは天草から八代海に入り、更に肥前に進み大村、有馬、島原などの地名を挙げる¹⁸⁾。

次いで平戸を経て「松本」に入る。松本は「古の入唐道なり」と説明しているので松浦を指しているのは間違いない。次いで博多津（法佳太茲）に入る。博多は大友義鎮の支配下にあった重要港であるにもかかわらず、鄭舜功は特に説明を加えていない。その理由ははっきりとしないが、博多は王直と関係の深い港であり、鄭舜功のライバルとでも言うべき蔣洲は王直と行動を共にしていたので、意識的に博多の情報を取り入れなかったのかもしれない。

次に、博多から豊前を通って山陽路の関門である下関を経て瀬戸内海を東進する海道を紹介する。ここでは山口、宮島、安芸、竹原などを挙げている¹⁹⁾。次いで備後地方に入ると、讃岐に通じる海路を挙げた後、備中牛窓、明石、備前播磨から兵庫港、西宮を紹介し、以後淀川を溯って下鳥羽に入る航路を説明する²⁰⁾。

最後に紹介されるのが「夷島陸道」である。

坊津から薩摩半島を北上して行く陸道で、一部「夷海上道」と重複するところもあるが、肥後、筑後地方を経由して筑前太宰府に至るもので、阿久根、八代などの地名が見える。途中筑後瀬高から豊後までは三日行程であり、二日目には「大高嶺」を越え、この峰の西麓には「湯泉」（右歪沸）があると記す。また筑前博多津から豊後までは四日行程とし、最初の一日で筑前府中（付茲）に至り、二日目に筑後を過ぎ、三日目に大高嶺を二つ越え、四日目に大高嶺と小低嶺を越えて豊後に達すと記す²¹⁾。

博多からは豊前（付射父）地方に入り、小倉を経て下関から山陽路を通行する。ここでもその陸道の一部は「夷海上道」と重複する。即ち長門、周防、山口、安芸から備後地方に出て、尾道、笠岡に至る。次いで備前地方の和気を通りて播磨地方に進み三木、明石から兵庫に至る。この後の陸道は西宮、山崎を経て行くのはやはり「夷海上道」と同じである²²⁾。

IV. 「隴島新編」（四巻）

1 日本地図の紹介

「隴島新編」は四巻よりなり、いずれも「奉使宣諭日本國新安郡人鄭舜功敘編」と記す。

「巻之一」には次の11図を収録し、その図について説明する。

- ①中國東海外藩籬日本行基圖、②豊後島夷意畫圖、③初梓考略圖、④續梓考略圖、⑤廣輿圖附圖、⑥日本圖纂圖、⑦夷都城関圖、⑧夷王宮室圖、⑨久保宮室圖、⑩山城坊市圖、⑪平戸島嶼圖。

これらの諸図のうち、鄭舜功は①～⑥図を「日本諸島の圖」とし、「按ずるに日本圖の中國に來る者は、凡そ七なり。其の一は定海考畧圖。其の二はまた定海續爲考畧圖。其の三は予初

めて彼に至り得る所なり。其の四は予久しく彼に館し之を得るなり。其の五は従事彼において後得る者なり。其の六は廣輿圖に附する所の者なり。其の七は圖纂の繪く所の者なり。」と記す。

前掲武安隆等著は『日本一鑑』中の日本図において、これらの日本図について考証して「日本国図六枚」のうち③④⑤⑥の「以上四枚が以前出版した著作から転載した日本図である。前の著者が描いた日本図を一か所に集め、読者が比較検討できるようにし、かつ鄭舜功は地図の出所と欠所についても簡単な評語を付している。」と述べている。即ち③は薛俊の『日本考略』の初刻本に付されたもの、④は同じく『日本考略』の再刻本に付されたもの、⑤は嘉靖版『広輿図』の中の日本図、⑥は鄭若曾の『日本図纂』に付せられているもの、即ち後に『籌海図編』に収録された日本図であることを明らかにし、同著に①②③⑥図を載せている。

武安隆等著は「鄭舜功はまたほかの二枚の日本図の出所も紹介している。一枚目の『豊後島夷意画図』は、彼が日本へ渡った当初入手したもので、図が非常に簡単で、主

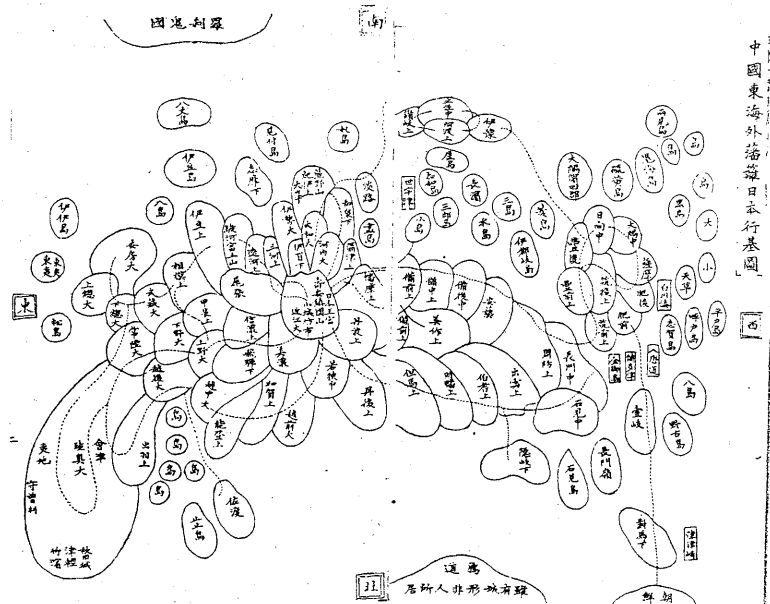


図4 行基図

な島を数島画いただけで、国別に分けず、『写意』にすぎないので、これを『意画図』と呼んだのであろう。二枚目の『中国東海外藩籬日本行基図』は、日本に永住して入手したもので、彼が紹介するように、この図は『すこぶる詳しい』。いまこれを、現存するあの有名な『行基菩薩説大日本国図』と対照して見ると明らかになるが、鄭舜功が入手したのは、まさにこの行基図であった。(轉)鄭舜功は、日本でこの行基図を入手し、それを中国人に紹介した最初の人で、中国人に正しく、詳しく日本を知ってもらおうとした功績は大きく認められる。」と述べている。上の鄭舜功の記述を見ると、確かに彼は日本到着直後に一枚を、豊後府内に「久しく館した」、即ち府内六カ月滞在中に二枚目の日本図を手に入れたと記している。

鄭舜功の二人の従事官沈孟綱等が手に入れた日本図もあったことが、鄭舜功の記述から判明する。しかし、この二人は鄭舜功に遅れて帰国の途に就いたが、「旋いで歸りて廣潮に陥殺せらる。潮人の得て之を燬く。予の未だ見ざる所の者なるも、疑うに是れ行基圖なるか。但だ原と夷の都會に得たる事、豈詳悉を加えざらんや。」とあるように、広東の海上で殺害され、日本の国都において得た日本図は、それは鄭舜功が「行基図」と推測したものであるが、焼かれ

てしまったのである。（「図4行基図」参照）

⑦「夷都城関圖」については、「都の東北阻むに大山を以てし、東の西南は海道に縁近す。故に立木多く、城に關防を設け以て共に之を守る。本國人に非らざれば、入るに易すからざるなり。」と記す。（「図5夷都城関圖」参照）

⑧「夷王宮室圖」については、「此れ夷王の宮は都會に居る。」と記し、宮室を構成する四殿・五舎・二楼・一院・一坊・一所・十二門の名称を紹介する。

⑨「久保宮室圖」については、「夷の相い久しく保んずるの舎。舎は夷の王宮の後にあり。」と記しているのも、⑧の王宮が公式な政治の場であるのに対して、⑨の宮室は私生活の場、即ち後宮を指していると思われる。

⑩「山城坊市圖」については、「山城は古名は山背。蓋し山の環りて城の如きを以て故に名づくなり。山城の左は夷の王宮なり。右は本都城なり。都城は本刺史百寮の民居なり。」と記し、以下東西、南北の街路名を紹介する。

⑪「平戸島嶼圖」については、「胡元其の水工圖を得たるも、今に傳わらず。疑うに此れと類すか。姑く之を存す。」と記す。

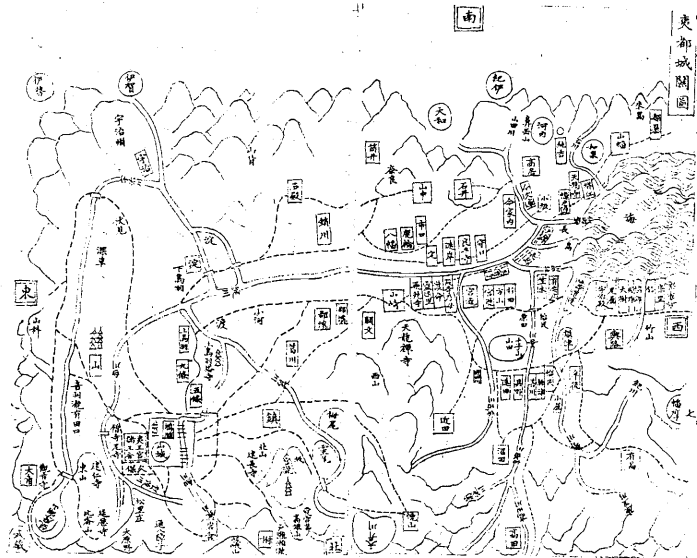


図5 夷都城関圖

2 日本に関する情報

「卷之一」～「卷之四」には日本、豊後に関する情報として多くの固有名詞を採録している。例えば「原」の項では、「豊葦原＝一に曰く葦原、日本の別号。」「大原＝野名、滝名。俱に山城に在り。郡名は出雲に隸す。」のように原に関する地名を挙げ、更にそれについて注記する。ここでは最初に日本全体に関わるものを中心に取り上げる。

「五畿」＝「山城、大和、河内、和泉、攝津の五國は京畿に屬す。故に五畿と曰う。」

「七道」＝「東海、南海、西海、北陸、東山、山陽、山陰。」

「國」＝「『魏志』に見ゆ。」として拘邪韓国、耶馬臺國以下の30国と「『隋志』に見ゆ。」として竹斯国、秦王国の2国を挙げる。次いで五畿、七道の諸国を挙げ、筑前国、筑後国、豊前国、豊後国、肥前国、肥後国、日向国、薩摩国、大隅国、壹岐国、対馬国の11国は西海に属すとしている。

また日本国は「古の倭國」、小扶桑国、支笠国は「日本の別稱」、黒齒国は「古は倭屬と為す。只今は倭の俗、齒黒を好み、故に通稱とす。」「耶摩國、（即耶摩國）、一に野馬臺國、即耶馬臺國

と云う。日本の古名。」と、日本国の異称、別称を記す。

「郡」=『『圖書』云う。夷王用明の時、郡凡そ五百八十三、陸奥郡九。夷王聖武の時、郡六百一。陸奥一部の郡五十四と多藝二郡は称せず。今の郡は算うるに六百一十有五。原数を除くの外、郡一十有四多し。未だ何氏の増設なるか詳ならず。』と記し、郡数の吟味を行っている。豊前国の統括する郡は「田河郡、企救郡、京都郡、仲津郡、筑城郡、上毛郡、宇佐郡、下毛郡」の8郡、豊後国は「日田郡、玖珠郡、真入郡、大野郡、海部郡、大分郡、速野郡、国崎郡」の8郡であると記す。「真入郡」は直入郡、「速野郡」は速見郡の誤りであろう。

「郷」=『『趙宋三朝志』は郷凡そ三千七百七十二とす。『國書』は今の郷総數凡そ九萬八千とす。未だ詳考に逮^{およ}ばず。』として、具体名を挙げない。

「村」=『『國書』村の總數凡そ九十萬九千八百五十八とす。未だ詳考に逮^{およ}ばず。凡そ有名な者は姑^{しば}く之を録す。』として、桑村、中村、四村、大村、今村、二村、安特村、黛村、下村の9村を録している。

「里」=距離としての里程と人名、地名で里のつくものを挙げる。

里程では、松浦から水行で朝鮮まで1440里、山東省の登州まで約3000里、坊津から水行で大琉球まで2580里、小琉球まで5520里、寧波まで3700里、福建まで5500里、広東まで7000余里としている。大琉球は沖縄、小琉球は台湾を指すと思われる。また京都から長門まで1978里、長門から下関を経て豊前の足屋まで200里、足屋から博多を経て坊津まで2180里という里程を挙げているので、これを合計すると京都から瀬戸内海、玄界灘、九州西海岸を経て坊津まで4300余里となる。また讃岐から土佐の椿港を経て豊後水道の四国側の柏島まで840里、土佐の浦戸から豊後水道を渡って日向の細島まで480里という数字も挙げている。

「田」=『『國書』田土は毎に町を以て論ず。通國田數は凡そ八十萬九千八百一十九町二段三步。五畿七道の列國の下に分註す。今算うるに八十九萬八千五百六町に至る。原の總計田數および對馬田數の未だ計せざるを除く外、今數は八萬八千六百九十一町多し。疑うに是れ後來開墾するものか。我においては未だ詳しからず。』と記し、日本の總田畝数について考察している。西海道の田一十萬九千六百九十九町のうち、豊前は一萬一千七百六十五町、豊後は一萬一千二百二十八町としている。

「地」=『『國書』地の總數凡そ一十一萬七千一百四十六町二十三步。今此れ未だ詳しからず。夷地且つ寛く、人の鋤墾に墮して、地に名づく者有り。』

「宇」=『『國書』仏宇の總數凡そ二千九百五十八』を示し、その他に地名の戸宇、津名の世宇、郡名の都宇、意宇を挙げる。

「宮」=「神宮・古女王の號。『國書』は神宮二萬七千七百一十二」と記し、「準三宮」は天皇の「王母、王妃、王子の居」、「太后宮」は「王母の居」、「后宮」は「王妃の居」、「東宮」は「王子の居」、「女御宮」は「王の諸侍妃の居」、「小野宮は古宮の名。親王これに居す」、「延久三宮」は「先王後三條院の時、諸子の居す所」と注記している。

「戸」=『魏志』『趙宋三朝志』、奄然が献上した『職貢年代記』などを挙げて戸数を考証しているが、「今の戸は未だ詳らかならず。」とする。

「神」=『『國書』宮を成す神は三千七百五十。宮を成さざる小神は一萬七千。』

「男」=『『國書』男一十九億九萬四千八百二十八。』

「女」=『『國書』女二十九億四千八百二十。』

男女の項目は、各々の人口を記しているのであるが、「億」に十万を単位とする数え方があ

るので、「一十九億」は190万ということであろう。女の人口が290万というのは、男の人口199万に比べて多すぎる感もする。『國書』が、日本におけるどのような資料を指すか明確でないので、疑問として掲げておく。

「口」=『趙宋三朝志』雍熙初め、其の國課丁八十八萬二千三百二十九口。」

「關」=「俗に役所と謂う。都會の四垂に關多し」,「玄關は夷の居の中門なり。又司牧の居は關殿と稱すること有り」と注記する。

「城」=「州の名。即山城。鳳城と曰うは都會を指す。二城と曰うは城樓を謂う。一に樓觀と謂う。漢より今に至るまで木を以て之をつくる。夷都の隘口は木城廿餘座あり。」

「題」=「探題・所名。筑紫に在り。『國書』鎮西探題。探題とは聲息を探聽して奏題するなり。」

「架」=「後架と曰う。小便所なり。夷の居多く之れ有り。二階架と曰う。一に飯間と曰う。蓋し一に盛飯所と曰う。夷の居多く之れ有り。」いわゆるトイレの説明である。

「好」=「三好・郡名。阿波に隸す。其の都の武臣勝長慶、世に三好長慶と號す。世よ武にして且つ文にも好し。故に能く仁を思い義を慕う。倭のまさに耶律楚材と云う。」三好長慶を耶律楚材になぞらえているのは面白い指摘である。

「衙」=「國衙・一に府國と曰う。一に府中と曰う。即府内。夷の中列國の稱通。」

「内」=「府内・豊後の司牧居る所の稱。夷の中列國の司牧居る所の通稱。」

この二つの語から、「府国」「府中」「府内」という語は同じ意味で使われたことが分かる。また大友義鎮の統治する現大分市は府内・府中と呼ばれたことも分かる。

3 豊後に関する情報

「院」=「龍源院、瑞峯院・俱に山城に在り。大徳寺瑞峯の檀越は豊後刺史源義鎮なり。本院住持の號は怡雲と稱す。豊後の僧俗、凡そ其の都に入らば、俱に本院に寓す。」「華岳院・豊後に在り。もと先の刺史源義鑑の香火院なり。」「壽光院、光明院・俱に豊後に在り。僧の居なり。」ここでは大友義鎮と京都大徳寺の深い関係（髓）が注目される。また同慈寺にあった華岳院は大友義鎮の父義鑑の菩提寺であったことが分かる。

「寺」=「萬壽寺・又寺名。豊後に在り。」「大徳寺・山城に在り。龍寶山開山崇峯妙超禪大燈高明正燈國師。其の嗣僧の九花和尚は文、儒學を知る。夷王源知仁、常に之に師す。夷使清授の教えを受ける寺なり。龍源、瑞峯の二院有り。」「海藏寺・臼杵原に在り。寺右の龍寶庵は天使を奉じて、嘗て之に館す。」「龍護寺・佐伯庄に在り。豊後刺史の香火院。寺僧清授は寺の住持たり。嘉靖丙辰、舟に附して報使す。志向は治安にあり。」「到明寺・豊後に在り。副使清超の居る所。」「太智寺・豊後に在り。寺僧清涼、祥玉は皆文教を崇ぶ流なり。」「妙觀寺、妙賢寺、能賢寺、龍賢寺、淨居寺、天徳寺・俱に豊後に在り。」「江水庵・豊後に在り。」

この「寺」に関する記述では、鄭舜功の滞在した海藏寺龍寶庵と鄭舜功とともに大友義鎮から明国に派遣された僧清授、僧清超の寺が明記されていることが注目される。また「庵」の記述においても、大智寺右の松月庵の僧清涼（梁）は、大友義鎮の父義鑑の時に明国に貿易を求める使者として派遣されたことがあると記す。

次に「山・海・島」など地名に関して、特記すべきと思われるものを取り上げる。

「山」=「彦岳山・豊後に在り。山は高くして天を挿す。山麓は海に濱す」として、現大分県南海部郡にある彦岳（639m）を挙げる。この彦岳は豊後水道の交通者にとって位置を確認

する山であった。またこの項目には所属地を注記せずに「木綿山」を挙げているが、これは現「由布岳」を指していると思われる。

「海」＝「東海・道名，又地名。即遠海は豊後に在り。」とし、「東海」「遠海」を「トウミ」と発音し、豊後の地名とするが現在の何処に当たるか不祥。

「島」＝「蒙島・孤山。一に佐嘉関と曰う。土佐の海中に在り。」とする。佐嘉関は「關」の項でも「佐嘉關は土佐，豊後の間に在り。坂關は豊後に在り。」と注記し、「坂關」として区別している。従って、「坂關」は現佐賀関に当たる。また「高島は豊後の海曲の中に在り。豊後刺史かつて之れに居す。」としており、「高島」は佐賀関沖にある海猫で名高い高島であろう。その他「小路島・孤山。豊後の海中に在り。」、「竹島・豊後に在り。」、「養島・孤山。豊後の海中に在り。」と豊後に關する島が紹介されている。また所属地を注記せずに「加作縫島」「家島」が挙げられているが、「加作縫島」は「カサヌイシマ」で、現在西大分の生石港町に万葉自然公園として名残を止める「小島」であろう。また「家島」は「ヨジマ」で旧鶴崎町三佐村家島であろう。

「津」として挙げられているのは「高田津」「竹田津」である。いずれも国東半島の港であろう。

「地名」「豊後に在り」として挙げられているのは「赤水，一に垢水と曰う。」、「浦部」，「室部」である。

「田名」「豊後に在り。」として挙げられているのは「原田」である。

「所」＝「隆府所・隆府より宗像に至るは皆豊後の土地の所。夷の中列國。地所は頗る多く，未だ其の詳に及ばず。敢えて収入するなし。茲にただ豊後の地所のみを云う。」と記す。ここでは「所名」で「豊後に隸す」としているものを，以下に列挙する。なお下線を引いたものは「殿名」としても挙げられているものである。

古府，勢家，澳濱，笠和，駄原，荏隈，豊饒，鹽九升，津守，下部，高田，牧，荻原，丹生，佐賀，婁土（瀬），臼杵，佐伯，紡方，大佐井，小佐井，入田，志賀，家中，佐志生，寧目，白谷，浪野，一萬田，朽網，白仁，田北，津久見，三重，井田，野津，宇田枝，巨次，清田，賀來，瀧河内，稲田，横瀬，狹間，真那井，田原，立田，田布，觀見，朝見，高嶺，別府，石垣，小坂，竈門，里屋，迫間，頭成，日出，加地，山河，八坂，太神，朝來（也），藤原，木付，都甲，安岐，真，武藏，伊美，來繩，櫛木，岐部，役見，吉弘，富來，富賀田，濱澳，宗像，真那井，下郡。「下部」は下郡の誤りと考えられる。

次に「殿名」を示す。「殿は夷君の臣民の通称」「其れ古夷王は地に臣を居らしめ，名を兼ねしめるを以て殿と曰く。」と記し，地名と殿名の一致を説明している。殿名では，最初に全国的に有名な新田殿，鎌倉殿，吉良殿，細川殿，山名殿，大友殿，大内殿など32名を挙げる。その後に「豊後侍者殿」として237名の殿名が採録され，最後に「已上は皆列国の君臣の殿號」と注されている。「豊後侍者殿」とは，「中列国」大友義鎮の麾下にある在地武士集団或いは豪族集団の頭領（臣）を示していると考えられる。鄭舜功は島津殿も大友義鎮の勢力下にあった「豊後侍者殿」としているが，この点は一考を要すであろう。しかし大友義鎮の勢力が日向の伊藤殿，土持殿，筑前の立花殿，秋月殿，豊前の京都殿，長門の陶殿などにも及んでいたとするのは正しいと言えよう。従って，以下には採録された殿名の全てを示す。ただ既に「所名」において下線を引いて「殿名」としたものは省略する。これらの殿名の中，豊後の地名，人名であるものを検討することにより，豊後における在地武士集団或いは豪族の分布を明らかにす

ることができるであろう。

日田、本庄、寒田、徳水、石田、小原、枕摩、田口、雄城、玉田、市河、植野、山下、田口次、秋岡、小山、久保、上野、中村、田尻、宇野、徳久、深刈、葛木、若林、惣瀬、吉岡、泉原、森迫、埴田、蘆荊、夏足、原尻、藤井、生石、世利、原、富田、三緒、国分、関、木田、永富、松武、正田、鳩、阿南、東家、武官、紀、神志那、今村、笠良、木怒留湯、波津久、八汲、大津留、小井手、久土地、平岡、御久里、小深田、升田、津光水、坂松、木上、石合、奈煩、森、古庄、小田原、矢野、高山、首勝、佐今、青、情、兵、賀、渡、上、堀、泰長、中峯、枚梁、惣木、帆足、大田、恒、長那、松木、野上、小田、少島、広瀬、惣良、魚返、原田、倉成、村上、真玉、右田、伊美、賀島、麻生、御来、波多、平賀、疫部、官迫、江戸、風早、佐保、升伯、間富、樵原、生野、日兎、五郡、長峯、霧渡、平林、日野、長小那、祝所、小野、鎌木、長尾、成清、戸上、亀山、志田、三川、熊、大和、寧佐、深田、金九、欄父、秋月、三潤、吉田、一法師、如法寺、薬師院、柴田、滇滇木、吉良、鳥羽田、瀬田、結成、野田、馬場、大窪、中城、志水、長隔谷、野下、会田、塩月、泥谷、弘末、切畑、富高、橋爪、木下、升尾、立石、足立、平河、洲山、片山、寺町、望月、平井、甲斐、里枝、安東、瀧口、町野、清松、坂部、赤峯、志摩津（島津）、伊東、立花、土持、三田井、片賀瀬、菱、渡菱、富木、田、京都、深柄、雙足、利光、袋、恵良、朝食、邊部、柄山、御手洗、八名、溝部、匂、陶、球珠、海部、入、部、仲津。

まとめにかえて

『日本一鑑』について著者鄭舜功、著作の動機を述べ、「桴海圖經」と「隴島新編」の内容について紹介してきた。ここに盛り込まれた情報は、16世紀の日本や豊後に関する資料としていかに貴重なものであるか了解されるであろう。大友義鑑、義鎮（謙）の時代を理解する上においても第一級の資料と言って差し支えないであろう。これらを日本語資料と突き合わせるとき、新しい発見がなされることを期待したい。なお続編においては「窮河話海」を取り上げ、同様に内容紹介と論評を行いたい。

註

1) 『日本一鑑』を用いた研究として次のようなものがある。神戸輝夫「16世紀豊後水道交通の一端－漢籍史料よりみた－《地域総合研究論文集『豊後水道域』大分大学教育学部 昭和55年3月》、『大分市史（下巻）』『海外交流編』林章・神戸輝夫執筆部分《大分市 平成4年3月》、神戸輝夫「16世紀中期九州豊後和中国東南区域的交流」《浙江大学人文学院・中国東方文化研究会歴史文化分会主催：中国東南区域史国際學術研討会提出論文 平成10年9月》、神戸輝夫「鄭舜功と蔣洲」《『大分大学教育福祉科学部研究紀要』第21巻第2号 pp.93～108 平成11年10月》、鄭樸梁生『明代中日関係研究』文史哲出版社 1985年3月、小葉田淳『中世日支通交貿易史の研究』刀江書院 昭和16年11月

2) 六興出版社 1989年7月

3) 武安隆等著『中国人の日本研究』 pp.80。

4) 武安隆等前掲書 pp.84。

5) 前漢武帝は匈奴の侵入を押さえるために、西方の大月氏国へ張騫を派遣して提携を画策した。張騫は途中匈奴に捕らわれたが脱出し大月氏国に至った。漢と大月氏国との提携はならなかったが、張騫は苦

節十数年を経て無事長安に帰還した。

- 6) 武安隆等前掲書 pp.75。 7) 武安隆等前掲書 pp.76。 8) 武安隆等前掲書 pp.75。
- 9) 武安隆等前掲書 pp.82。
- 10) 澳濱と釜江の位置関係など、この文についての考証は、前掲拙稿「16世紀豊後水道交通の一端」参照。
- 11) このことについて『沈んだ島―別府湾・瓜生島の謎―』《瓜生島調査会編 昭和52年7月》pp.186に神戸が解説している。また岡本良知「戦国時代の豊後府内港」《『大分県地方史』第十号 昭和31年12月》も鄭舜功の掲げる豊後水道沿海の港について紹介している。
- 12) 以下断らない限り、本文で地名を挙げるときは現在の地名を示している。
- 13) 山川から佐伯に至る間には次のような地名が記述されている。山川＝山河は古の大隅地方、植宿（易付自氣）、種山（太業耀邁）、鹿島（佳世邁）は今の薩摩（肥後）司牧島津が之れに居す。次いで宮内（密耀烏致）は大隅司牧之れに居す。次いで喝食（課射氣）、又内曲に転じて高洲（太佳自）に至り、次いで下津＝島津（世目茲）、茂戸島（目課佳世邁）、根島（業茲密）。次いで大泊＝大門泊（阿大邁利）、月浦津＝膽月（氣目茲氣）、志布志（世布世）、小島（固世邁）。小島は海曲に在り、港は僅に舟を通じ、水は浅く潮の退けば、舟は膠して泊まり難し。次いで千湊＝血野湊（致儒怒密奈大）。湊口は停すべきも、湊内は舟を膠し、繫泊に堪えず。次いで門浦＝戸浦（大儒烏刺）、目井（蔑異）、油不郎（押付刺）、内海（烏致烏密）。内海は古日向（沸烏佳）地方。また内海から内陸に入ると、阿蘇（押梭）、朽網（固太密）、田北（太氣太）、豊後（付課）、澳濱（烏氣法邁）、田原（太歪刺）、玖珠＝球珠（固自）、小倉＝小郡（課固刺）、赤坎関（押佳邁射氣）、府中＝府国（固易・固委）、挂坐（法固）、阿嫂（押腮）、舟木（付業氣）、山甲（耀邁奈佳）、小郡（課固刺）、山口（耀邁固致）に至るとしている。内海から海道を取ると、赤井（押佳異）、伯（阿致口課）、徳譚（大固儒付致）、耳（密密）、土持（茲致邁茲）、細島（荷梭世邁）に至る。細島から四国の浦戸に渡る海道があると記す。次いで佐伯（肥氣大大）、垢水＝赤水（押佳密茲）、東海＝遠海（大烏密）に至る。
- 14) 柏島（押射歪世邁）、駒妻（固邁蔑）、清水（世密茲）、足津（押射茲密肥氣）、津龍（茲儒太茲）、四崎（右茲氣）、洲崎（茲肥氣）、浦戸（烏刺大）、庭（迭易）、東津留＝戸路（大儒茲六）、室三崎（慕六茲六密肥氣）。
- 15) 江浦＝上浦（耶儒烏刺）、椿泊（茲法氣大邁利）、奴島（怒世邁）、淡路（押法致）、大門島（大目佳世邁）、来島（課世邁）。和泉（易茲密）、堺江（肥佳耶）、小坂（阿肥佳）。
- 16) 守口（目利固致）、八幡（耀歪太）、淀（欲大）、下鳥羽（世目大法）。ここから葛川（佳茲刺佳歪）を通過して山城（耀邁射六）に達す。
- 17) 平戸（沸刺大）の説明では「古は肥前地方、今は豊後に隸す。」とし、長野（奈佳儒）、今津（易邁茲）、呼戸（課大）から博多に至ると言う。
- 18) 西薩摩では豊津（固世）、門泊（大邁利）、片浦（押大利）、伊地久＝伊筑（易致固）、今日泊＝京泊津（耀大邁利）、阿久根（押固業）、小野瀬（課儒儒鉢）を挙げる。次に肥後（沸課）地方に入る。天草（押邁固肥）。ここより内海に入ると白河湊（世利佳歪密奈大）、軍瓦＝戸坂浦（大儒肥佳固烏刺）＝江坂浦（易致肥佳固烏刺）。次に肥前（沸射父）に入る。井澤＝伊佐草（易肥歪）、大村津（阿慕刺茲）、三浦（密儒烏刺）、有馬（押利邁）、島原（世邁法刺）、三江（密耶）、瀬戸（射大）、松本（邁茲刺）。
- 19) 豊前から瀬戸内海に入る所では足屋（押射耀）、山陽長門（奈佳大）、挂摩關＝赤坎關（押佳邁射氣）、山口（耀邁固致）、周防（自法烏）を挙げる。周防には「大内司牧左京兆大夫の居る所。」と説明する。次いで宮島（密耀世邁）、安藝（挨氣奈）、釜戸（佳邁佳利）、竹原（太杰歪刺）、友地＝戸摩（大儒密）を挙げる。
- 20) 備後では連島（茲刺世邁）＝志和久（世法固）を挙げ、志和久は讃岐（肥怒氣）に通じると説明する。

山陽備中（沸茲致烏）では牛窓（烏世邁大），山陽備前（沸射父）では，室（慕六），明石浦（押佳射烏刺），幡摩（法里邁），兵庫港（押耀烏課儒烏刺）＝日護（沸課）を挙げる。五畿攝津（茲儒固父）では杉田川（自大佳歪），中港長川（奈佳密佳歪）を挙げ，ここには橋があり舟の通行を阻むとしている。次に下港幡部川（歪大奈大佳歪），西宮（父世儒密耀）を挙げ，西宮は摂津の司牧の居る処と記す。次に杉田（自太），山崎（耀邁腮氣），下鳥羽（世目大法），上鳥羽（佳密大法）を経て日本王の居である山城（耀邁射六）に到達する。

21) 西海薩摩地方では伊筑（易致固），井利市＝伊力（易利致），阿久根（押固業），根島（業茲密）を挙げる。次いで肥後（沸課）地方では八代（耀茲射六），高足＝鷹瀬（大佳世）から筑後（致固課）地方の瀬垂＝瀬高（世太佳）に入る。瀬高から平戸へは海を渡り，更に陸行し再度海を渡ると記す。瀬高から宰府（腮付）に通じ，ここは古の太宰府又は探題所と記す。次いで西海筑前（致固射父）に入り博多津（法佳太茲）に至る。

22) 博多津から先の行程は狩＝満（烏茲刺），国羅＝小倉（課固刺）或いは小郡（阿固父），足屋（押射耀），以上「豊前地方は人烟にして駐すこと可なり」と記す。次いで赤坂関以下は基本的に「夷海右道」の記述と同じであるが，新たに次のような地名を追加して挙げている。山口の次に小畑＝小波田（阿法大）。安芸の次に廿日市（法茲佳易致），壁＝壁部（佳穴），肚＝山原（易迭歪刺），吉田（右世太），横田（沸課太），高山（太佳耀邁），戸九＝三原（密歪刺）。備後地方では尾道（阿儒密致），成輪（奈利歪），笠岡＝河歌（押梭押），品川（佳奈佳歪），分気＝和気（歪杰）。備前地方では焼山（耀氣耀邁），酌子（射固世），五着（阿法固）。播磨地方では三木（密氣）。また「幡磨地方は浦多く人烟にして駐すこと可なり」と記す。

23) 武安隆等前掲書 pp.89～90。

24) 武安隆等前掲書 pp.90～91。

“Ri Ben Yi Jian”（日本一鑑）by Zheng Shun-gong（鄭舜功）
— “Fu Hai Tu Jing”（桴海圖經）and “Jue Tao Xin Bien”（隴島新編）—

Teruo KANBE